「主イエス・キリストの到来を待つ」

イザヤ書7章14節、ルカ福音書1章26－38節

森島　牧人　牧師

今日は4本の蠟燭のうちの3本目にも灯が点されました。4本目の蠟燭に灯が点されるとクリスマスですから、真の光が私たちのところに来られるその準備の最終段階に入ったということになります。先回も話しましたが、教会では4本の蠟燭それぞれに意味を付けて灯を点して来ました。1本目は希望、2本目は平和、3本目は喜びで4本目が愛を表していると考えて来たのです。その言い伝えに従えば今朝は喜びの灯が点されたということで、希望・平和の灯に加えてあと1週間でクリスマスを迎えるという喜びの灯を私たちの心の中にも点して参りたいと思います。

振り返りますとこの1年にもいろいろな出来事がありましたが、どちらかと言えば悲しい事が多かったように思います。未曾有の被害をもたらした自然災害、世界中で発生した大規模火災、そしてロシアとウクライナ、イスラエルとハマス、ミャンマーでの内戦など人災と言える戦いも続いています。それは世界的にも地球的にも危機的な状況と言えます。もちろん各国は人道支援策を講じてそれを実行していますが、それでもなお多くのところで被弾や被災による困難は続いていますし、地球の環境破壊は止めることの出来ないままむしろ拡大し、私たち人類に大きな不安をもたらしています。

しかし、このような中にあって隘路の中の小さな光ではありますが、愛を持って共に生きるという心が、多くの国の人々の中に大きく育って来ていることも確かです。優しさ、思いやりなど、愛による親切を深く思い、その実現のために日本中が、否、世界中が心を傾けているのです。今ここにいる私たちも、神の家族・地球の愛の家族として同じ思いであることを思います。

さて、皆さんもよくご存じのクリスマスの物語ですが、この物語に登場する人物たちはいろいろな価値を持った人たちで、私たち人間を代表しているように思われます。ローマ帝国の皇帝アウグストゥス、ユダヤの王ヘロデ、まさに彼らは富を持ち、権力の上に座っている人々です。また東国から来た博士たちは、知識・知恵・技術の担い手としての人々です。一方、ご降誕の時に主イエスを見ようと集まって来た羊飼いたちは、夜間も労働をしている人々です。こういう人々が、時には対立したり、また妥協したりしながら生きている、その世界の状況は2千年前の物語の時代も、またこの21世紀も変わらないのではと思わせられます。

しかしこのクリスマスの出来事は、実はこれらの人々、権力者・知識人・労働者のすべてにとってくショックな出来事＞でした。富でも権力でも知識でも仕事でもなく、それらとは全く異なった価値である＜愛＞の誕生だったからです。聖書は2千年の昔、あのベツレヘムの馬小屋で生まれたみどり児が、どのようにこの＜愛＞を生き、またその＜愛＞に死んで行ったかを、多くの人々に伝えて来ました。まさに教会の働きの大きな一つは、そのことにあり、私たちキリスト者のするべき事柄も、そこにあることを改めて思わされるのです。

ところでこの時期になると毎年テレビ・ラジオで、町で、またもちろん教会で多くのクリスマスソングが歌われますが、そんなクリスマスソングの中で私が中・高生時代に出会ったのがビートルズの「Let it be」でした。「苦しみ悩んでいる時には　マリアが現れて　貴い言葉をかけてくださる　Let it be」と歌われるこの曲のタイトル「Let it be」は、CDの解説では「なすがままに」と訳されていますが、実はこの言葉はクリスマスの物語の中の＜マリアの言葉＞なのです。正確には「マリアは言った。『わたしは主のはしためです。**お言葉どおり、この身になりますように。**』そこで天使は去って行った。」(ルカ1:38)というマリアの言葉の一部です。そして、このマリアの言葉、「お言葉どおり、この身になりますように」からクリスマスの出来事は始まりました。つまりクリスマスはこの愛の誕生・神の子イエス・キリストの誕生を祝う時だからです。そしてまたこの神の愛・神の光は、＜私たちの中にも生まれ、私たちが互いに手をつなぐことによってそれをさらに大きな希望の光・愛にして行きましょう＞というのがクリスマスなのです。

聖書は「乙女から生まれた男の子がインマヌエルと呼ばれる」ことが＜福音＞であると語っています。男の子を通して「神が私たちと共におられる」ことが私たちに伝えられたということ、それこそが福音、喜びなのです。そしてその光が来る時、私たちの中にも＜愛＞が生まれる・・・。そう言う意味でもうれしい喜ばしいクリスマスです。もう一週間、その神の子の愛をお迎えする準備が出来ますように、祈って行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）